

第2節 学習に関する意識と実態

1. 得意なこと・苦手なこと

学習に関しては、小学生で得意なことが多い。5年前に比べ、回答割合が増えたのは小学生では「勉強の計画を立てること」「自分で立てた勉強の計画を守ること」、中・高校生では「パソコンを使うこと」である。また、性格が「ねばり強いタイプ」の子どもの方が得意なことが多い。

◆物を作ることが得意な小学生、 論理的思考が得意な高校生

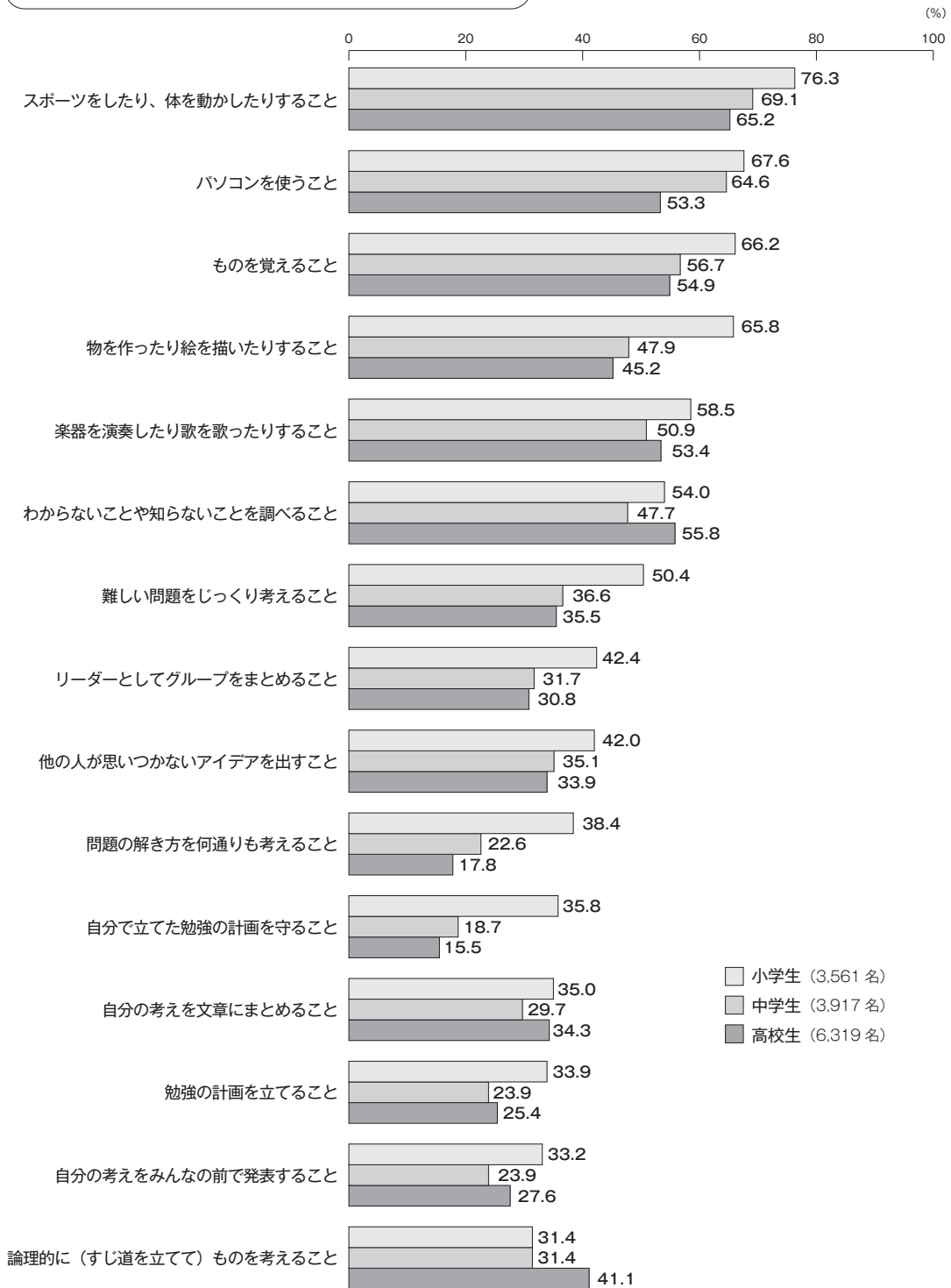
子どもに、学習に関する得意なこと・苦手なことをたずねてみた。まず学校段階別の結果をみてみよう（図3-2-1）。

ほとんどの項目において、小学生のほうが「得意」（「とても得意」+「やや得意」、以下同）と回答した割合は高い。とくに「物を作ったり絵を描いたりすること」「問題の解き方を何通りも考えること」「自分で立てた勉強の計画を守ること」では、小学生と高校生との間に20ポイント以上の差がある。これらの項目に関して、客観的にみて、小学生が中・高校生より得意であるかど

うかは別として、少なくとも小学生の自己効力感が高いことがわかる。高校生の回答比率が高いのは「論理的に（すじ道を立てて）ものを考えること」（小・中学生31.4%、高校生41.1%）、「わからないことや知らないことを調べること」（小学生54.0%、中学生47.7%、高校生55.8%）である。

また、「自分の考えを文章にまとめること」「自分の考えをみんなの前で発表すること」は小・中・高校生を通して、「得意」とする割合が低く、2～3割にとどまる。どの学校段階の子どもも考えをまとめる力、文章力、表現力があまり得意でないと感じているようである。

図3-2-1 得意なこと・苦手なこと（学校段階別）



注) 「とても得意」+「やや得意」の%。

第3章 学習について

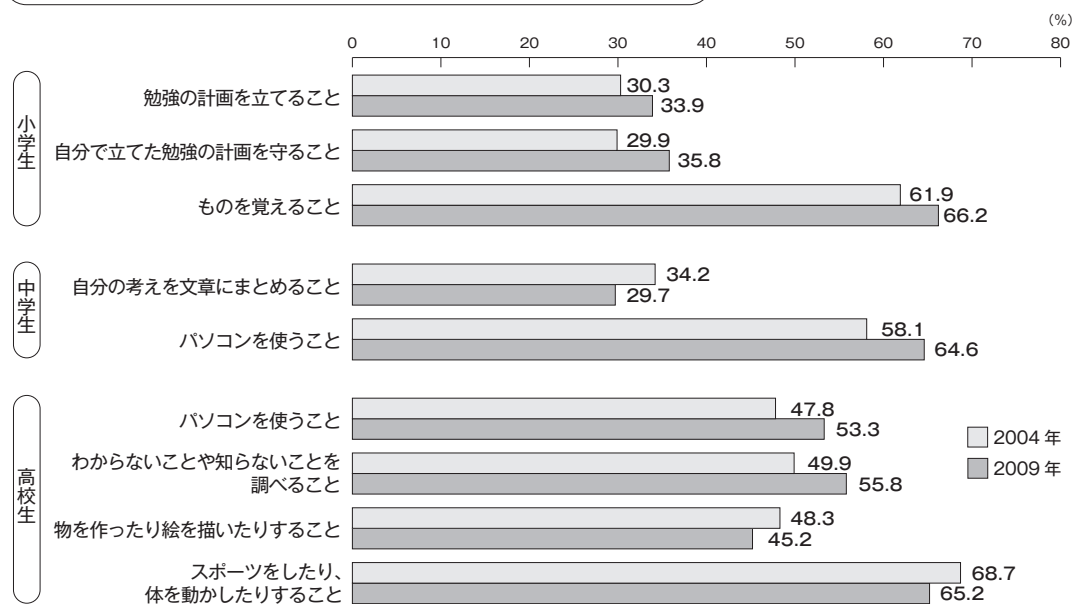
◆5年前に比べ、「ものを覚えること」が得意になった小学生

2004年の第1回調査からの5年間で、子ども自身が「得意」「苦手」と感じることに変化はあったのだろうか。全体的にみると、どの学校段階でも経年変化があまり多くないが、小・中・高校生の経年変化を図3-2-2にまとめてみた。小学生において、2004年に比べて、「勉強の計画を立てること」(3.6ポイント増)、「ものを覚えること」(4.3ポイント増)、「自分で立てた勉強の計画を守ること」(5.9ポイント増)が「得意」と感じる割合は高くなった。中学生では、「パソコンを使うこと」が「得意」と感じる割合が増加したが、「自分の考えを文章にまとめること」が減少した。高校生では、「得意」と回答した比率が増加したのは「パソコンを使うこと」「わからないことや知らないことを調べること」で、「スポーツをしたり、体を動かしたりすること」「物を作ったり絵を描いたりすること」は若干減少した。

◆得意とするものが多いのは「ねばり強いタイプ」の子ども

人が得意や苦手と思うことはその人の性格と関係があると考えられる。ここで、子ども自身の性格と得意なこと・苦手なこととの関係をみてみたい。子どもの性格をたずねた質問で、「ねばり強く最後まで続けるほうだ」に対して、「とてもそう」あるいは「まあそう」と回答した子どもを「ねばり強いタイプ」とし、「あまりそうでない」あるいは「ぜんぜんそうでない」と回答した子どもを「ねばり強くないタイプ」とする。図3-2-3からわかるように、スポーツ能力、勉強の計画立て、立てた勉強の計画の実行、知らないことを調べること、物事を論理的に考えることなど、さまざまな面において、「ねばり強いタイプ」の子どものほうが「得意」とする割合が高く、「ねばり強くないタイプ」の子どもとの間に10～30ポイントほど差がある。かつそれはどの学校段階でも同様の傾向がみられた。性格は生まれつきのものもある一方、生まれて

図3-2-2 得意なこと・苦手なこと（学校段階別、経年比較）



注1) 各学校段階で3ポイント以上増減があった項目のみ図示。

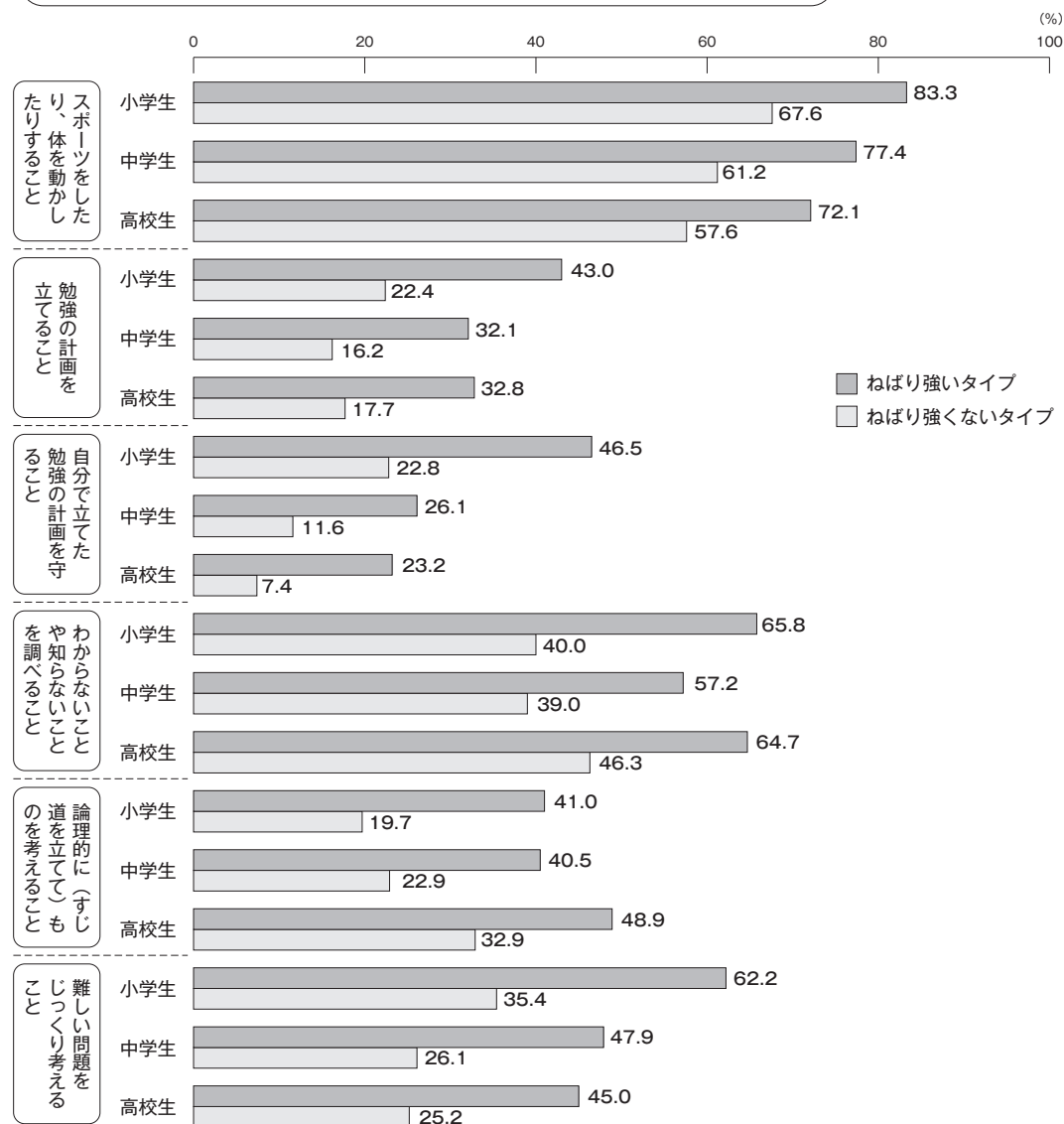
注2) 「とても得意」+「やや得意」の%。

注3) サンプル数は、2004年（小学生4,240名、中学生4,550名、高校生6,051名）、2009年（小学生3,561名、中学生3,917名、高校生6,319名）。

から育つ環境や鍛えることによって身につくものもある。小さい時から、どんなことにもねばり強く取り組み、最後までやりぬくことを多く経験することが大切であるとする。ねばり強

く取り組むことによって、苦手なことが得意になる可能性が十分考えられる。得意にならなくても、少しでも苦手意識が解消でき、自信につなげることができるかもしれない。

図3-2-3 得意なこと・苦手なこと（学校段階別・ねばり強いタイプ別）



注1) 子ども自身の性格を問う質問で、「ねばり強く最後まで続けるほうだ」に対して、「とてもそう」「まあそう」の回答を「ねばり強いタイプ」とし、「あまりそうでない」「ぜんぜんそうでない」の回答を「ねばり強くないタイプ」としている。

注2) 「とても得意」+「やや得意」の%。

注3) サンプル数は、「ねばり強いタイプ」(小学生 1,945名、中学生 1,926名、高校生 3,254名)、「ねばり強くないタイプ」(小学生 1,552名、中学生 1,926名、高校生 2,990名)。

2. 勉強する理由

勉強する理由をみると、「今までできなかったことができるようになるから」や「問題が解けるとうれしいから」と感じる小学生が多い。一方、高校生は「自分がつきたい仕事につくのに必要だから」「いい大学に入りたいから」勉強するという実用志向が強い。さらに、高校生では高校偏差値層別による違いもみられた。また、親子関係と子どもの学習意欲とが関係していることがわかる。

◆親にほめられたいから勉強する小学生、 仕事や進学のために勉強する高校生

子どもは何のために勉強しているのだろうか。勉強する理由について10項目でたずねてみた。図3-2-4は学校段階別にみた2009年調査の結果である。

小学生の特徴としては、3つあげられる。1つめは全般的に肯定的回答(「とてもそう」+「まあそう」、以下同)が高いことである。10項目のうち、「友だちに負けたくないから」(46.5%)、「成績が悪いと親にしかられるから」(34.0%)の2項目以外は肯定的回答が5割を上回る。小学生はさまざまな理由や動機で勉強していることがわかる。

2つめは達成感や内面の充実を感じ勉強に向かう子どもが多いことである。上位の勉強する理由をみると、「今までできなかったことができるようになるから」(75.9%)、「問題が解けるとうれしいから」(74.9%)となっている。

3つめは親にほめてもらうために勉強する子どもが約6割いることである。勉強する理由について、学校段階による差がもっとも大きかったのは「成績がよいと親がほめてくれるから」である。小学生が58.9%であるのに対して、中学生は45.8%、高校生は30.6%で、小学生と高校生との間に28.3ポイント差がある。改めて小学生にとって親のかかわりが大切であると感じる。

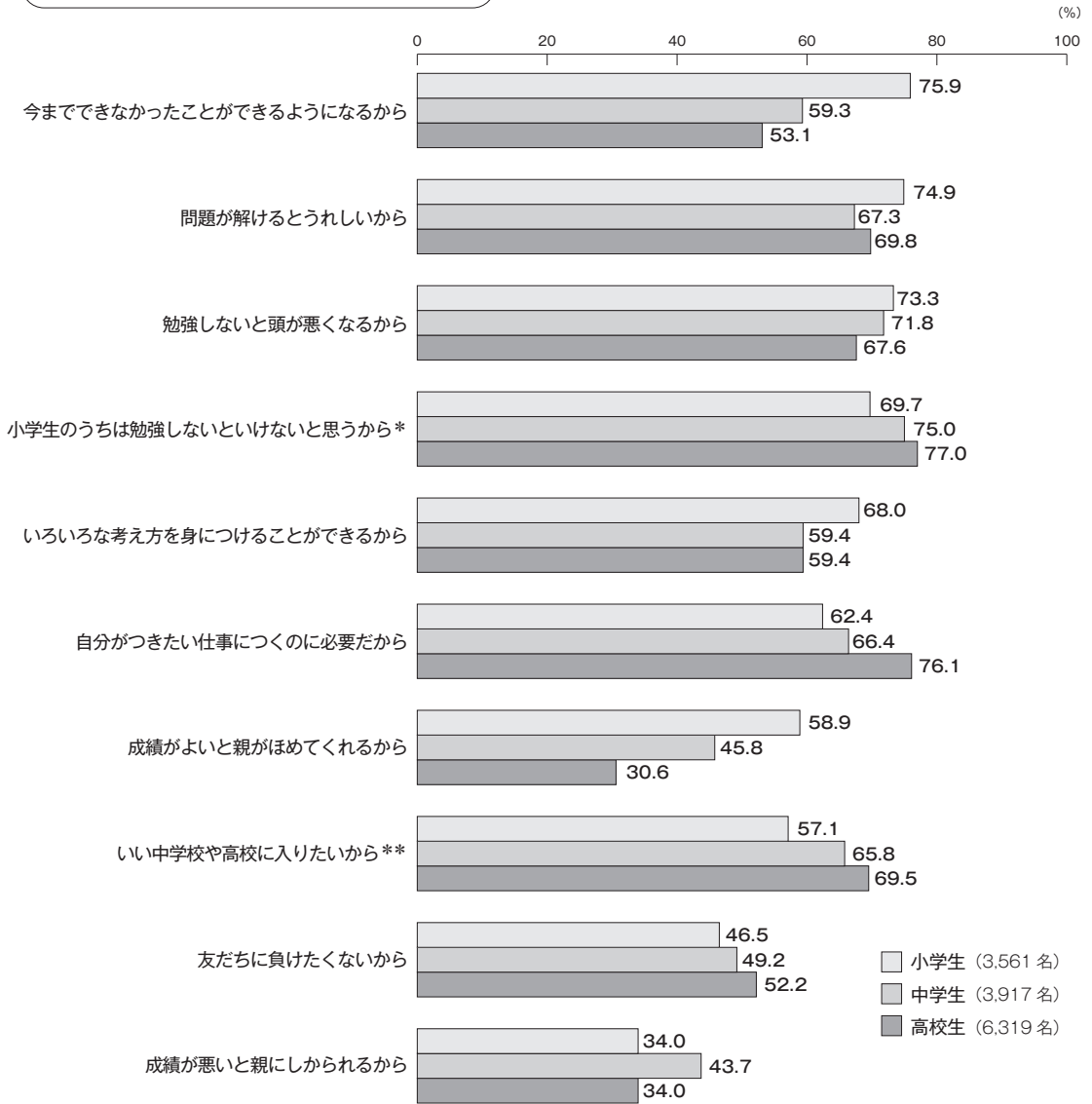
次に、高校生の特徴をみてみよう。「高校生のう

ちは勉強しないといけないと思うから」(77.0%)、「自分がつきたい仕事につくのに必要だから」(76.1%)、「問題が解けるとうれしいから」(69.8%)、「いい大学に入りたいから」(69.5%)が上位を占める。高校生は実用志向が強く、自分の将来の進学や職業と結びつけて勉強していることがわかる。一方、「問題が解けるとうれしいから」では約7割の回答を得ていることから、高校生は実用志向が強いだけでなく、勉強そのものの楽しさがわかって勉強に取り組む生徒も多い。

中学生の特徴は、数値的には小学生と高校生の中に位置づけられる。ただし、「成績が悪いと親にしかられるから」だけは、小学生と高校生が34.0%であるのに対して、中学生は43.7%で、9.7ポイントも高い。中学生は高校受験があるため、親は子どもの成績がかなり気になるのも一因ではないかと推測する。

勉強する理由について、2004年からの経年変化はあまりみられなかったため、ここではグラフを省略した形で、簡単な記述にとどめたい。2004年に比べ、小・中学生では「成績がよいと親がほめてくれるから」の比率が微増した。高校生では「いい大学に入りたいから」が増加した。第1章で述べたように、親子関係がより密接になっているので、勉強する理由として「成績がよいと親がほめてくれるから」をあげる小・中学生が多くなったことと関連していると考えられる。

図3-2-4 勉強する理由（学校段階別）



注1) *は小学生に対する質問項目で、中学生に対しては「中学生のうちは勉強しないといけないと思うから」、高校生に対しては「高校生のうちは勉強しないといけないと思うから」となっている。

**は小学生に対する質問項目で、中学生に対しては「いい高校や大学に入りたいから」、高校生に対しては「いい大学に入りたいから」となっている。

注2) 「とてもそう」+「まあそう」の%。

第3章 学習について

◆「いい大学に入りたいから」の回答が増えている進路多様校の高校生

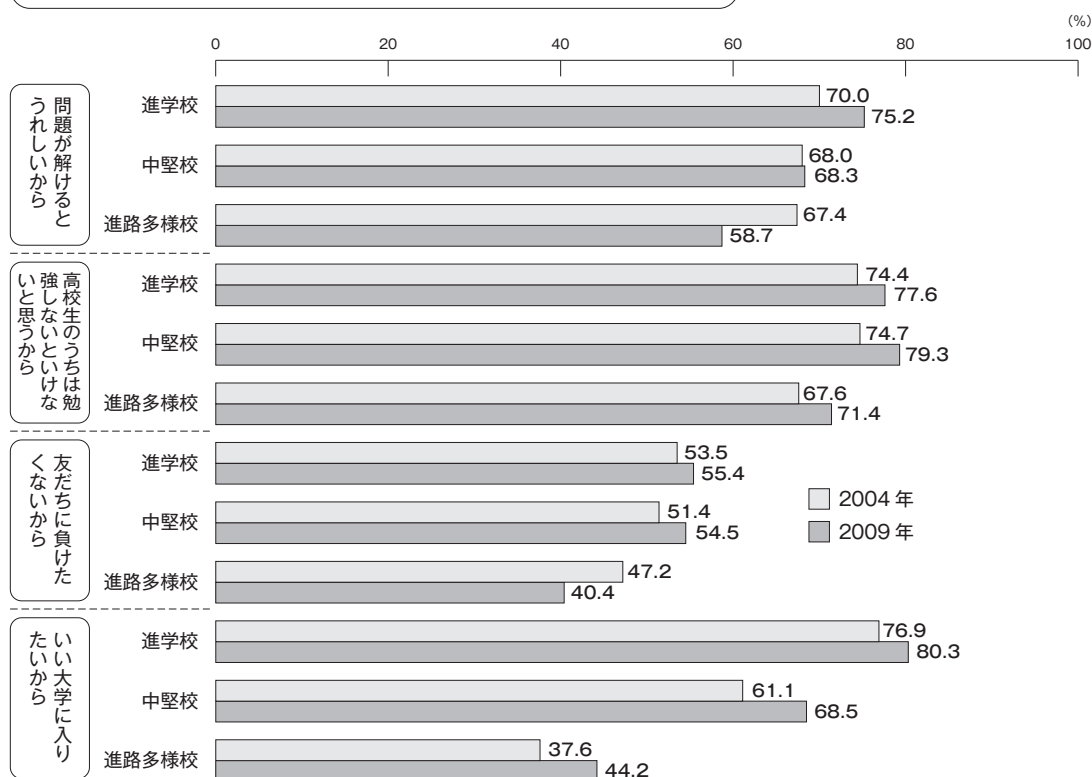
次に、勉強する理由と成績との関係を探りたい。小・中・高校生は同様の傾向がみられたため、もっとも特徴のある高校生のデータを取り上げてみたい。図3-2-5は高校生の高校偏差値層別にみた経年変化である。進学校の傾向としては、2004年からこの5年間で、「問題が解けるとうれしいから」は52ポイント増加した。「いい大学に入りたいから」は34ポイント微増した。進学校の生徒は学習の中身をより重視し、学習の楽しさを感じながら、また進学への高い意欲を持って勉強している様子である。

進路多様校では、「問題が解けるとうれしいから」は2004年の67.4%から2009年の58.7%へと、8.7ポイント大幅に減少した。また「友だちに負

けたくないから」は2004年の47.2%から2009年の40.4%へと、6.8ポイント減少した。一方、「いい大学に入りたいから」は6.6ポイント、「高校生のうちは勉強しないといけないと思うから」は3.8ポイント増加した。充実志向や友だちとの競争、切磋琢磨が少なくなったが、進学への意欲が高くなった進路多様校の生徒の姿がうかがえる。

いい大学に入りたいという実用志向重視の傾向は進学校でも進路多様校でもみられる。しかし、学習の中身を重視する「問題が解けるとうれしいから」という充実志向は、進学校の生徒では肯定的回答が増加しているのに対して、進路多様校の生徒では減少している傾向にある。内発的動機づけにおいてこのような二極分化の拡大が高校生のこれからの学習にどのような影響を及ぼすのか、少し気になる。

図3-2-5 勉強する理由（高校生、高校偏差値層別、経年比較）



注1) 「とてもそう」+「まあそう」の%。

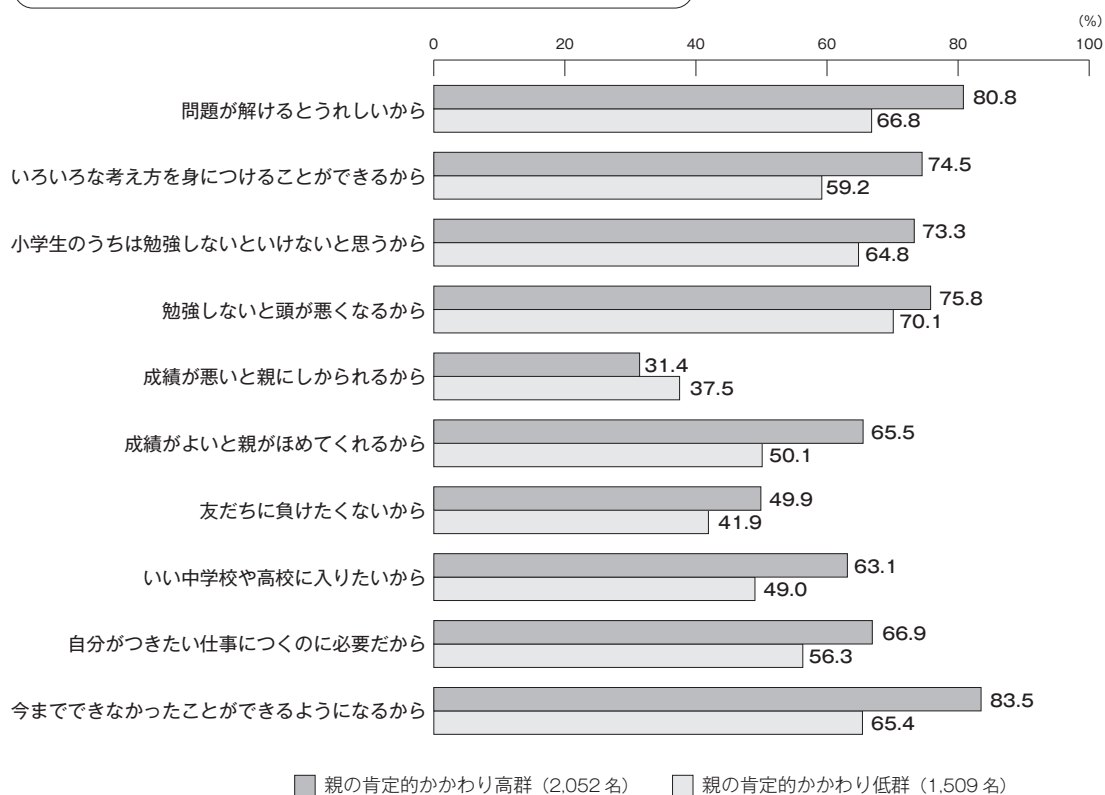
注2) サンプル数は、2004年（進学校 2,494名、中堅校 2,364名、進路多様校 1,193名）、2009年（進学校 2,976名、中堅校 2,156名、進路多様校 1,187名）。

◆子どもの学習動機づけになる良好な親子関係

親子関係が密接になっているのは2009年調査の1つの大きな特徴といえる。ここでは、親のかかわりと勉強する理由との関係を探ってみたい。親のかかわりについては、肯定的かかわりを示す5項目と否定的かかわりを示す5項目、計10項目をたずねている。分析の手続きとしては、まず親との関係に関する質問（あてはまるものをすべて選ぶ）で、「勉強を教えてくれる」「いいことをしたときにほめてくれる」「悪いことをしたときにしかってくれる」「困ったときに相談にのってくれる」「あなたのことを大人として扱ってくれる」の肯定的かかわりの5項目について、選択を1点、非選択を0点とし、5項目の総得点を算出した。そしてその総得点から「親

の肯定的かかわり高群」と「親の肯定的かかわり低群」に区分した。小・中・高校生で同様の傾向がみられたので、ここでは小学生を例として取り上げる。小学生の親の肯定的かかわりによる勉強する理由の違いを図3-2-6にまとめた。すべての項目において、高群と低群との間に5ポイント以上の差がある。しかも「成績が悪いと親にしかられるから」を除き、高群のほうが高い回答比率を得ている。とくに、「今までできなかったことができるようになるから」は両群で20ポイント弱の差、「成績がよいと親がほめてくれるから」は15ポイント以上差がある。良好な親子関係が子どもの学習動機づけになっていることがわかる。

図3-2-6 勉強する理由（小学生、親の肯定的かかわり別）



注1) 親の肯定的かかわりを聞いた5項目の合計点によって高群(4~5点)と低群(0~3点)に分ける。

注2) 「とてもそう」+「まあそう」の%。

3. 勉強の取り組み

勉強の取り組みについて、テストの見直しや問題を解いた後の答え合わせなど、基本的な学習習慣が身についている小学生は6割前後、そして中学生では今までもっときちんと勉強しておけばよかった、また、問題を解いた後答え合わせをする、高校生では上手な勉強方法がわからないといった項目で回答比率が高い。また、成績と親のかかわりによる勉強の取り組みの違いもみられた。

◆テストの見直しをする小学生、テストの事前準備をする中学生、勉強方法に悩む高校生

勉強する理由を述べてきたが、ここで、子どもは実際どのように勉強に取り組んでいるのかを分析していきたい。

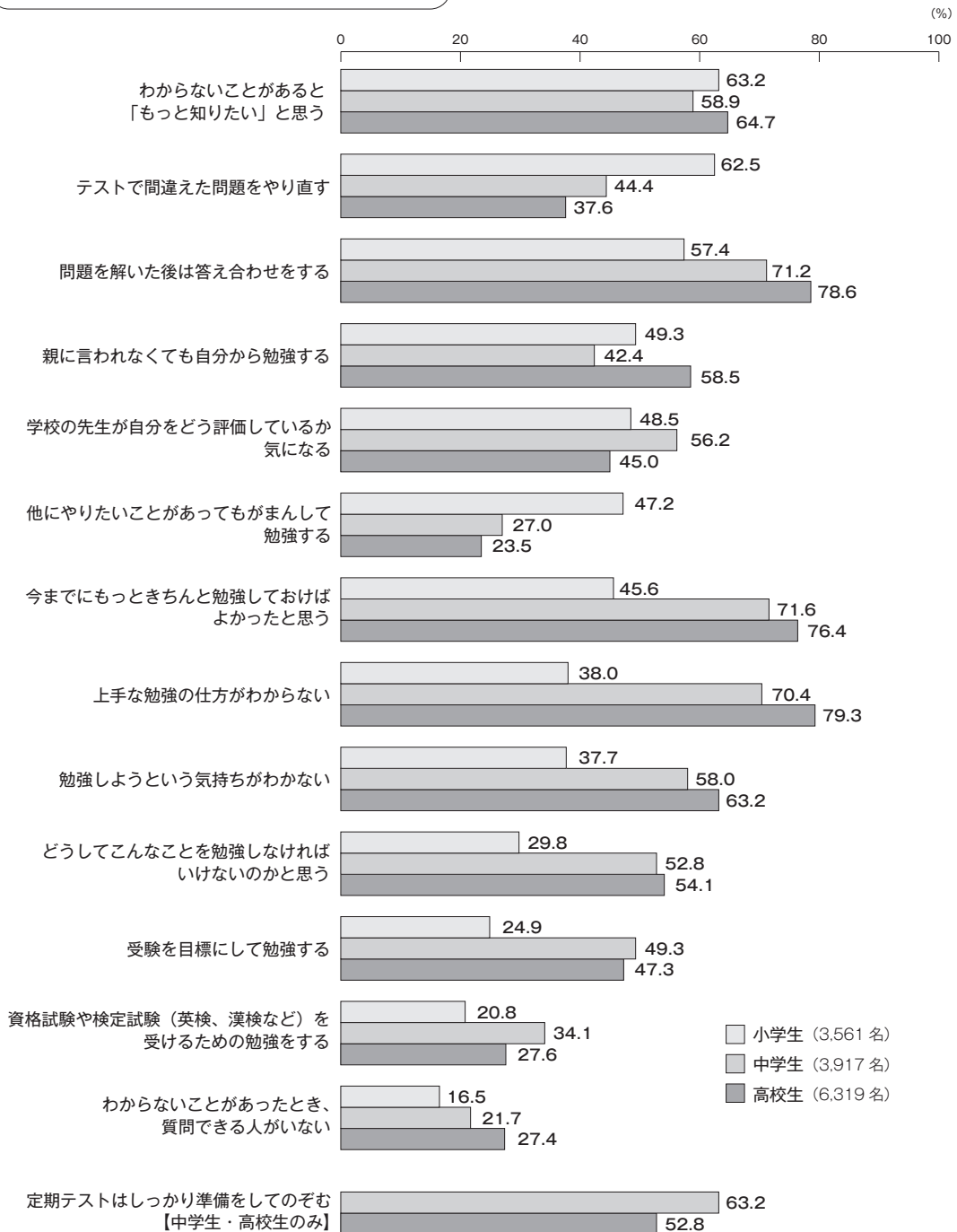
図3-2-7は学校段階別にみたものである。小学生の結果をみると、「とてもそう」+「まあそう」の回答比率では、「わからないことがある」と『もっと知りたい』と思う(63.2%)、「テストで間違えた問題をやり直す」(62.5%)、「問題を解いた後は答え合わせをする」(57.4%)が上位3位を占める。また「他にやりたいことがあってもがまんして勉強する」は5割弱で、中・高校生より20ポイント以上高いことが特徴である。知的好奇心が高く、答え合わせや問題の見直しといった基本的学習習慣が身について勉強に取り組みながらも、勉強のためにいろいろなことをがまんしていると感じる小学生の様子である。

学校段階が上がって、高校生になると、「上手な勉強の仕方がわからない」(79.3%)、「問題を解いた後は答え合わせをする」(78.6%)、「今までもっときちんと勉強しておけばよかったと思う」(76.4%)が上位3位に浮上する。勉強方法に悩み、今までもっと勉強すればよかったといった後悔の気持ちを持つ高校生が多いといえる。また「勉強しようという気持ちがわからない」(63.2%)と「どうしてこんなことを勉強しなけ

ればいけないのかと思う」(54.1%)でも肯定的回答割合は5割を超えている。今取り組んでいる勉強に対する疑問やネガティブな気持ちを表す項目の多くが上位に入っていることがわかる。前述したように高校生になると、小学生のように親にほめられるから勉強すると考えている子どもが少なくなる。一方、実用志向、いい大学に入りたいから勉強する子どもは増加する。したがって、勉強の目的がはっきりするときには勉強に向かい、逆に目的が見つからないときには勉強しようとする気持ちがわからないのであろう。

中学生については、肯定的回答比率がもっとも高いのは「今までもっときちんと勉強しておけばよかったと思う」で、71.6%である。「問題を解いた後は答え合わせをする」(71.2%)と「上手な勉強の仕方がわからない」(70.4%)が第2位、第3位と続く。基本的には高校生と同様の傾向がみられた。また中学生の特徴としては、「定期テストはしっかり準備をしてのぞむ」(63.2%、小学生にはたずねていない)、「学校の先生が自分をどう評価しているか気になる」(56.2%)、「受験を目標にして勉強する」(49.3%)では小学生と高校生より回答比率が高い。逆に「親に言われなくても自分から勉強する」は42.4%で、各学校段階で回答比率が一番低い。中学生は高校受験を強く意識して勉強に取り組んでいることと関連しているかもしれない。

図3-2-7 勉強の取り組み（学校段階別）



注) 「とてもそう」+「まあそう」の%。

第3章 学習について

◆自律的勉強ができる成績上位層、

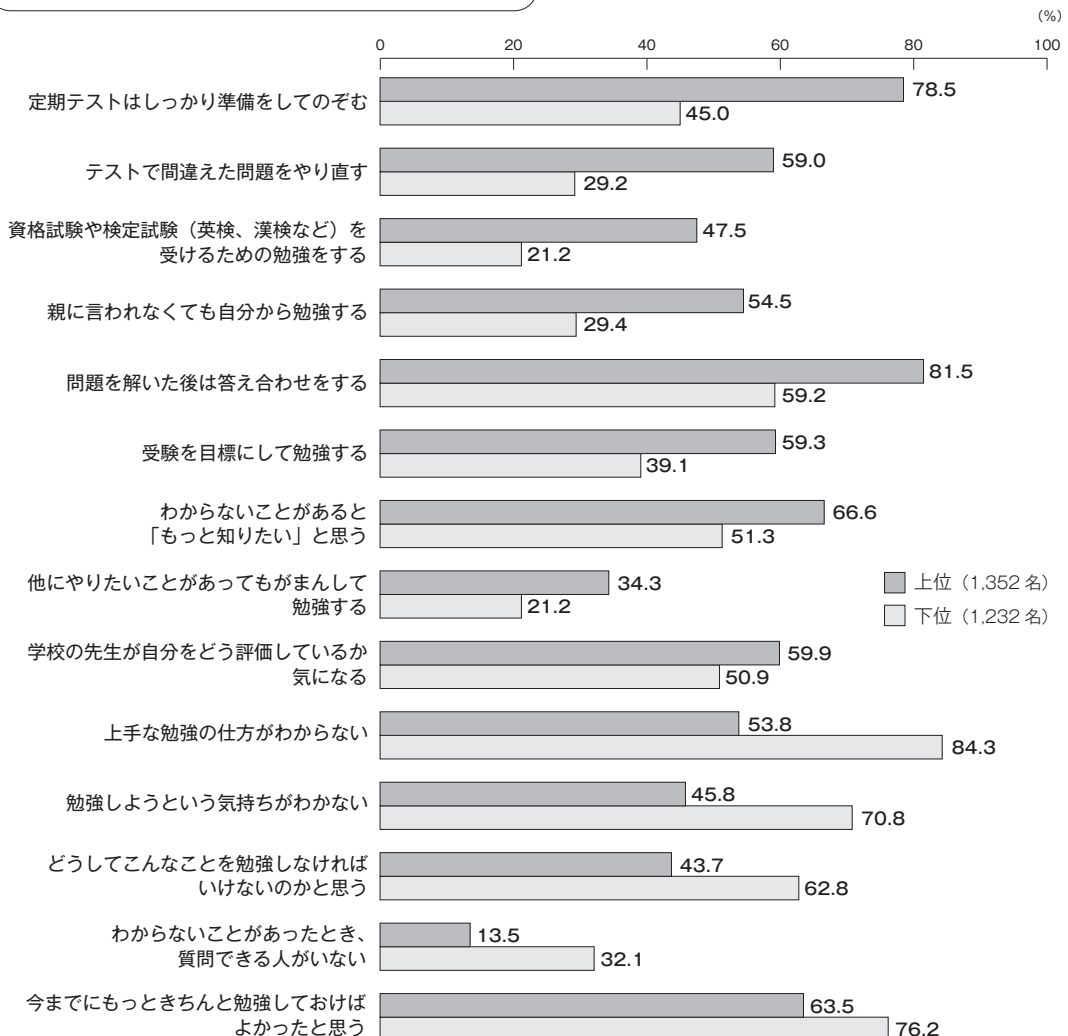
上手な勉強方法がわからない成績下位層

次に、成績と勉強の取り組みとの関係を探ってみたい。紙幅の都合で、中学生の2009年のデータだけを取り上げる。図3-2-8は成績別にみた中学生の勉強の取り組みである。テスト前の勉強、テスト後の見直し、問題を解いた後の答え合わせ、親から言われなくても自ら勉強するといった自律的勉強や知的的好奇心などの面では、成績上位層は下位層より高い肯定的回答を得ている。ただし、他のことをがまんして勉強する、学校の先生の評価が気になるなど、成績

上位層も悩みを抱えていることがわかる。

一方、成績下位層のほうが回答比率が高いのは「上手な勉強の仕方がわからない」「勉強しようという気持ちがわからない」「どうしてこんなことを勉強しなければいけないのかと思う」などの項目である。とくに「上手な勉強の仕方がわからない」成績下位層は上位層との間に30ポイント差が開いている。また「わからないことがあったとき、質問できる人がいない」で、成績上位層と約20ポイント差がある。成績下位層の勉強に対するサポート、とくに勉強方法について支援することが必要ではないだろうか。

図3-2-8 勉強の取り組み（中学生、成績別）



注1) 成績は国語・数学・理科・社会・英語の自己評価の合計点によって3区分した。図から成績「中位」を省いた。

注2) 「とてもそう」+「まあそう」の%。

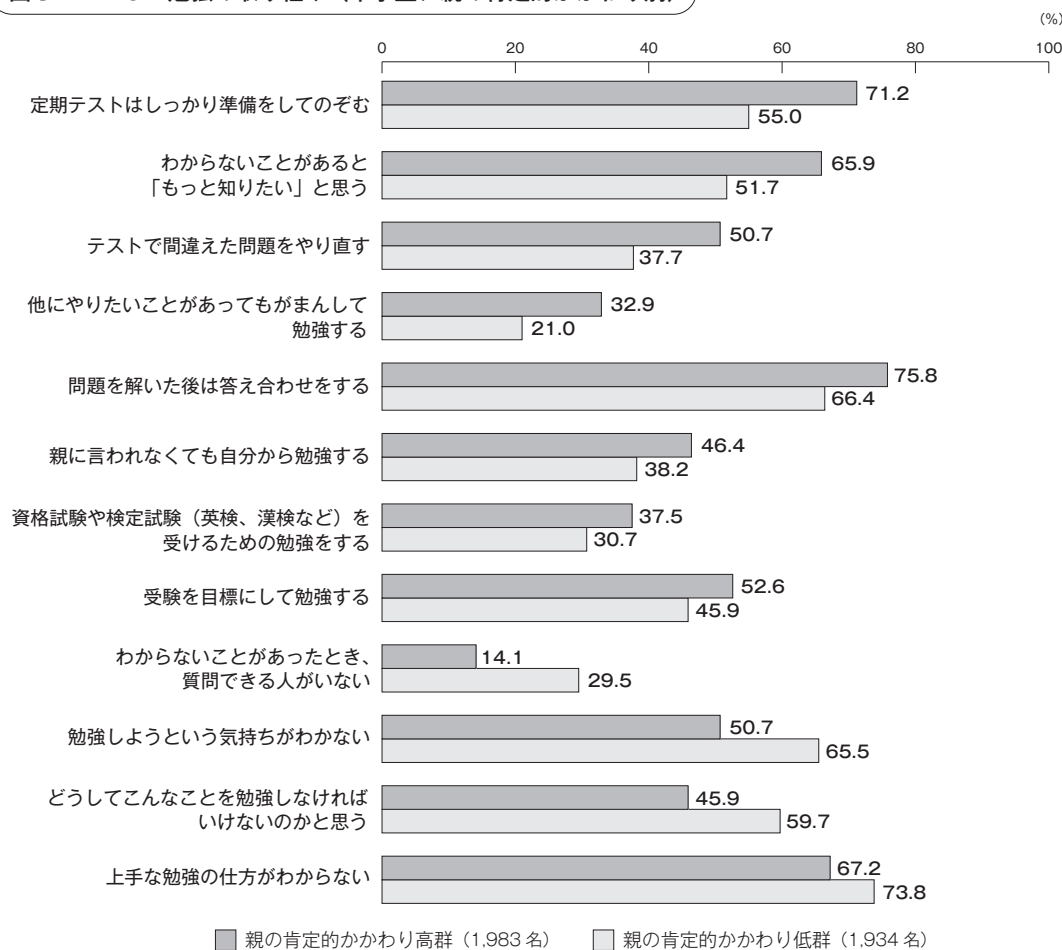
◆親のかかわりによる勉強の取り組みの違い

勉強の取り組み方と成績と関連があることを述べてきたが、ここでは、さらに親の肯定的かかわりとの関係を検証したい。分析の手続きについてはp.109と同様のため、ここでは省く。中学生のデータを取り上げた図3-2-9からわかるように、「親の肯定的かかわり高群」で「とてもそう」+「まあそう」の回答比率が高いのは8項目である。とくに計画的勉強、勉強の内容を知りたいという知的好奇心、テスト後の見直し、他のことをがまんして勉強するという忍耐力の面において、高群は低群より10ポイント以

上差をつけている。

逆に、低群が高群より回答比率が高いのは4項目である。「わからないことがあったとき、質問できる人がいない」「勉強しようという気持ちがわからない」「どうしてこんなことを勉強しなければいけないのかと思う」では、低群のほうは高群より10ポイント以上高い。親のかかわりによって、中学生の勉強への気持ちや勉強の取り組みが大きく異なる。子どもにとっての親のかかわりの大切さがわかるデータである。このようなことは中学生のみならず、小学生と高校生にも同様の傾向がみられた。

図3-2-9 勉強の取り組み（中学生、親の肯定的かかわり別）



注1) 親の肯定的かかわりの5項目の合計点によって高群と低群に分ける。

注2) 「とてもそう」+「まあそう」の%。

注3) 全14項目のうち、「親の肯定的かかわり高群」と「親の肯定的かかわり低群」の間に5ポイント以上差がある12項目を図示。

4. 進学希望

中学受験についてたずねたところ、この5年間で「受ける」の回答が微減し、「まだ決めていない」が増加している。将来の進学希望では、小・中学生では経年による変化はみられないものの、高校生で「四年制大学以上」の回答が微増している。また親の学歴による子どもの進学希望の違いがみられた。

◆中学受験で「受ける」が微減、「まだ決めていない」が増加

本項の最後に、各学校段階の子どもの進学希望をみていきたい。

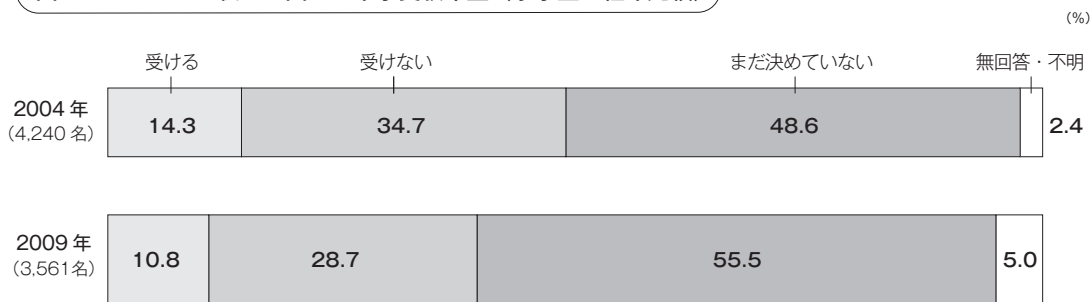
ここでは小学生に対して、中学受験についてたずねている。「あなたは私立中学校や国立中学校を受けるつもりですか」の質問について、「受ける」と回答したのは10.8%で、2004年の14.3%に比べ、3.5ポイント微減している。しかし、「受けない」もまた6.0ポイント減少している（2004年34.7%→2009年28.7%）。一方、「まだ決めていない」の回答は、2004年では48.6%だったが、2009年では6.9ポイント増で55.5%と、5割を超えている（図3-2-10）。

さらに、ここでは図表を省略しているが、経年での学年別データをみても、小4生から小6

生まで、どの学年も「受ける」の回答が微減するが、小4生と小6生は「まだ決めていない」も増加傾向にある。とくに小6生の段階で「まだ決めていない」は約16ポイント増加している。本調査のデータからだけでは、中学受験熱がこの5年間で増加したのか、それとも低下したのかは断定できないが、小6生の段階になっても、受験するかどうか迷っている子ども（受験させるかどうか迷っている親）が増えているとはいえるだろう。

また、2009年調査では、近年増えている公立中高一貫校についてもたずねている。傾向としては、私立や国立の中学校と公立中高一貫校とはそれほど変わらない。1割弱が「受ける」、2割が「受けない」、6割弱が「まだ決めていない」と回答している（図表省略）。

図3-2-10 私立・国立の中学受験希望（小学生、経年比較）



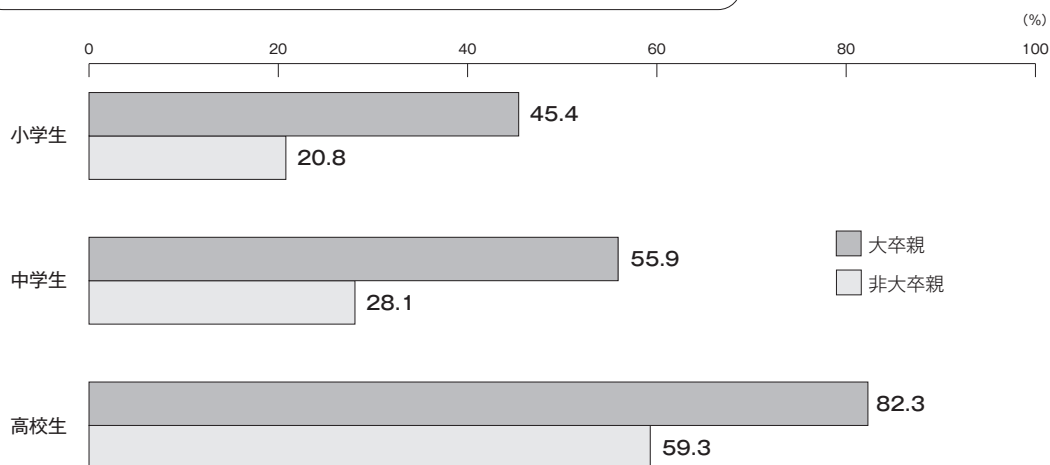
◆親学歴による子どもの進学希望の違い

小・中・高校生に、将来どの学校まで進みたいのかを聞いた。「大学（四年制）まで」+「大学院（六年制大学を含む）まで」の回答比率をみると、小・中学生は3割弱から4割で、2004年に比べ、横ばいである。高校生は2004年で67.1%だったが、2009年で71.7%と微増している（図表省略）。

最後に、子どもの進学希望と親の学歴との関係を見てみよう。親両方が非大卒を「非大卒親」、親両方かどちらか大卒を「大卒親」とし、各学

校段階の子どもの「四年制大学以上」（「大学（四年制）まで」+「大学院（六年制大学を含む）まで」）希望との関係を見たのが図3-2-11である。どの学校段階でも、「大卒親」をもつ子どもが「非大卒親」をもつ子どもより「四年制大学以上」の学歴を希望する割合が高く、両者では20ポイント以上差がある。また図表は省略するが、先ほどみた中学受験希望も「大卒親」をもつ子どもに多くなっている。子どもの進学希望と親学歴とが関係していることがわかる。

図3-2-11 「四年制大学以上」希望（学校段階別・親の学歴別）



注1) 親の学歴を聞いた質問「お父さんは大学や短期大学を卒業している」「お母さんは大学や短期大学を卒業している」で両方選択していなかった人を「非大卒親」、どちらか選択した人を「大卒親」としている。

注2) サンプル数は、大卒親（小学生 1,244名、中学生 1,698名、高校生 3,403名）、非大卒親（小学生 2,317名、中学生 2,219名、高校生 2,916名）。